



ヒマラヤ・キリマンジャロ・ヨーロッパアルプスなどなど、世界中のトレッキングコースをずいぶん歩いたが、南米へ行くのは初めてであった。昨年の5月にはメキシコのトルーカ山というところへ行って、“始めて南米へ来ました。”と挨拶したら、“ここはまだ北米です”と笑われてしまった。今度こそ南米へと思って、ペルー・アンデスのトレッキングへ参加した。アンデス山脈は、南米大陸の西側に沿って、北緯10度から南緯50度まで南北7500km、幅750kmにわたる世界最大の褶曲山脈で、ベネズエラ・コロンビア・エクアドル・ペルー・ボリビア・アルゼンチン・チリの6カ国にまたがっていて、最高峰はアコンカグア(6960m・一説には7021m)で、6000mを越える高峰が20座以上聳え立っているという、アンビリーバブルな巨大山脈である。その中のブランカ山群というごく一部分に触れたに過ぎないが、世界中の山好きに人気投票を行ったら一番になったことがあるというアルパマヨ山も今回のブランカ山群にある。



1. アメリカ経由ペルーまで

今回はアトランタでのトランジットでペルーのリマへ行くので、大阪や名古屋の人たちもいったん成田で集合して、全員でアトランタへ向かう。男3人、女5人の構成である。例によって60歳の私が最年少かなと思える、ジジババ軍団である。

成田で配られたメンバー表を見ると、愛知さん(60歳を少々出たと思える女性)は県名だけで住所が全部は書いてない。荷物もやけに少ない。登山靴で成田へ来たので、去年のアンナプルナと一緒に私が奇人と名づけた早稲田氏を思い出す。彼の場合は17日間の日程に対して手荷物だけで機内預け入れ荷物もなかったが、あの時はシュラフを持参する必要はなかった。彼女の場合はメインのザックこそ機内預け入れ荷物としたが、今回はかさ張るシュラフ持参である。私の場合は、防寒具なども含めるとダッフルザックが一杯になってしまっていて、土産を買ったら帰りはどうなってしまうかと取り越し苦労するほど荷物は多かった。ツアーリーダーが心配して、“これで全部ですか?”と彼女に確認すると、“いけませんか”といった対応をする。ますますアンナプルナの早稲田氏と姿がラップする。“私の住所は下々には教えないわよ”というタイプかと思ったが、最近はやりの個人情報保護法の関係で、旅行申込書に「住所非公開」のチェックマークがあり単にそれを書き入れただけのもので、他意があったわけではないということはだいぶ旅行が進んでから聞いた。そのチェックマークに私が気付かなかっただけみたいである。

12時間の飛行を経てアトランタへ着く。トランジェットであるのでアメリカへの入国審査なんか関係ないはずであるが、例のテロ事件以来アメリカでは違うらしい。一人ひとりの審査時間もずいぶん長い。やっと私の番になって黒人女性審査官の前に行ってパスポートを差し出すと、いきなりペラペラペラッと何か言っている。きょんとしている、パスポートを返してくれてもう行けというジェスチャーをする。指紋や写真も取られるはずであるので、人差し指を上げて指紋はいいのかというジェスチャーをすると、猫を追っ払うようなしぐさでさっさと行けと言う。けっこういいかげんである。さらに6時間飛行機に乗ってやっとペルーの首都のリマに着く。

今度のメンバーは姉妹のカップルが一組あるだけで、あとは一人での参加である。ホテルの部屋などは特に希望がない限りは二人一組であるので男女とも半端が出る。第1日目は私がひとり部屋になった。アトランタで時計を合わせて、さらにリマで再調整をした。昨年購入した高度計付きの腕時計は、アナログの針とデジタル数値表示の2段構えになっている。去年のアンナプルナのときはデジタルだけ現地時間に合わせてアナログは日本時間のままにしておいた。今回もそのつもりでいたのだが、前回のときにアナログの針がデジタルの数字の上に来たときに時間が分からなくなったことを思い出した。今回はアナログも合わせようとやってみるが合わせ方を思い出さない。適当にいじったが面倒くさくなったのであきらめて寝た。目が覚めるとあたりはまだ暗いのに起床時間の6時に近い。おかしいなとは思うがリマの早朝がどのくらいの明るさなのかは判らない。日本のようにベッドサイドにホテルの備え付けの時計なんて付いていない。ウェイクアップコールを待つがかかってこない。ツアーリーダーに電話を掛けようかとも思うが、もし自分の時計が違っていたのであれば申し訳ないので、支度を整えてホテルのフロントの前にある食堂まで下りていく。食堂は閉まっている。フロントの柱時計を見ると、なんとまだ4時半である。女性のクラークから声をかけられる。“May I help you?” “Sorry, I made a mistake.” デジタル数値表示にアナログの針を合わせたつもりが逆をやってしまったらしい。この事件以降どうも今回の旅の前半は調子が狂うことが多かった。

第2日目はリマから登山拠点の都市であるワラスまでパンアメリカン・ハイウェイを北上する(南半球での北上というのはなんとなくしっくりこない)。パンアメリカン・ハイウェイは、南アメリカを貫いて長大につながっているらしい。初めて南米へ来た、南米へ来た、と喜んでいたので、地図を見るとここは南緯12°程度であり、さらに赤道へ近づいて行く訳だ。

2. ドライブ山行

朝から昼まで4時間くらいパンアメリカン・ハイウェイを走って海辺のレストランで昼食を取

る。白身魚の酢漬けのような料理が美味しくいっぱい食べる。隣の席に配られた皿にはまだ余っているのでそれまでもらって食う。道はパンアメリカン・ハイウェイを離れて山の方へ向かう。海拔 0m から 4 050m のコノコーチャ峠へ一気に登る。ここでわが身に異変が起きてしまった。海外へ行くと、私はたいてい下痢気味になる。ズーと続くわけではない。海外へ行って 2 日目か 3 日目だけである。また日本へ帰った時も同様になる。何かにつけて神経の鈍い私にしては考えられないことであるが意外に環境変化に弱いのかもしれないし、5 年前に大腸を 40 cm ほど切ったのが影響しているのかもしれない。いつもは我慢できる範囲内であるが、このときはひどかった。バスが休憩するたびにトイレに駆け込む。最後は出るものがなくなって小便がケツから出るような状態になってしまった。なんせ苦しい。もしかしたら海辺のレストランで人一倍たくさん食べた白身魚の酢漬けが利いたのかもしれない。コノコーチャ峠からは、これから行くアンデス山脈の中のブランカ山群が広大な平原のはるかかなたに見渡せる。この平原も 3 000m 以上のところに位置するわけであるので、マラソンの練習なんかはここでやればいいのにと。ここから 2 日間滞在する 3 050m の登山拠点都市のワラスの町へ下る。



写真 1 平原の向こうにそびえるアンデスの山々

3 日目は高所順応と称して、ウルタ峠 (4 890m) へ行く。

途中、牛やロバや羊を連れた牧夫に何組も出会う。女性はすそが大きく開いた民族衣装を着た人が多い。原色の派手な色が多いので、どんな美人かと期待をして前から見ると、たいていはバア様でがっかりさせられる。若い人は民族衣装など着ないようである。

ヒマラヤなどで高所順応という、例えば 4 000m のところに泊まる時は、一旦 4 100m くらいまで登っておくと、4 000m における高所順応ができ易いといわれている。ところが今回はウルタ峠までマイクロバスで行ってしまう。これで本当に高所順応ができるのかなあ、と疑問に思う。苦勞のないところに成果はあるのか、などと日ごろの不真面目人間を棚に上げて、殊勝なことを考える。しかしそれにしてもこの道はすごい道である。良くこんなジグザグ道を作ったものだと感心させられる。バスに乗っているだけでも怖い。ウルタ峠からは、これから何日間かお付き合いする雪を抱いたワスカラン山が真直に迫る。バスでらくらく来てしまったので、ここでも感動というヤツはもうひとつである。

次の日からテント生活になるので、いよいよト



写真 2 牧畜風景と民族衣装の婦人



写真 3 ウルタ峠へのジグザグ道

レッキングの始まりかと思うと、この日も車による移動だけであった。途中でワラス市内の市場見物などをする。ペルーは十数年前までは治安の悪いところであったようであるが、今では外務省の発する治安情報などを見ても安全な国になっている。市場の風景を見ても一般の人々はもともと穏やかな人たちであることを伺えさせる。このあたりはインディオの血を引く人が多いのであろう。

ヤングヌコ谷にある湖のほとりの牛の放牧地には、先に車で到着していた現地スタッフによってすでにテントが張られていた。テントに泊まったので翌日はいよいよ歩きはじめかと思ったが、ヤングヌコ峠(4737m)を超えてヴァケリア村まではまたバスによる移動である。モルゲンロート(ドイツ語で朝焼けの意)の山を見るために、まだ暗い早朝に出発したが早すぎてしまったのでバスの中でしばらく待つ。

ワスカラン・ワンドイ・チャクララフ・チョピカルキがモルゲンロートに輝き始めるとみんな一斉にシャッターを切り始める。70歳は過ぎているであろうと推測される三島氏は、三脚にカメラをすえつけて本格的である。カメラも3組持っている。行動中はこれらの荷物を持つために専用のポーターを雇っている。ようやく日の出を迎えたが、歩き疲れて見る景色と違ってバスで楽々来てしまったので、もうひとつノリが悪いと感じたのは私だけか。チーフガイドのギョヤツアーリーダーの鈴木さんが一生懸命に山の名前を教えてくれるが、自分で登るにはレベルが高すぎるので、関心もわかず山名なぞ一向に覚えられない。一生懸命にシャッターを切りまくるみんなが普通人で、私に変人なのであろう。このあたりの山は一面がゲソッと削り取られたような山容が多い。

3. トレッキング

ヴァケリア村からはいよいよトレッキング開始である。最初から高度3700mあるので、ゆっくり歩く。ヒマラヤなどのトレッキングと同様なシステムが定着しているようである。テントは二人一組で、トイレテント・食堂テントなどもやり方は一緒である。朝と夕食時には洗顔用のお湯が各テントまで届けられ、モーニングティーもこれに続く。ヒマラヤのシステムをまねたのかと思うが、これは私の推測である。トレッキング道や指道標の整備状況も良い。



写真 4 ワラスの市場



写真 5 ワスカランをバックにガイドたちと



写真 6 モルゲンロート



写真 7 パリア谷出会いのテントサイト

ホセ君は、行動中は三島氏の個人ポーターであるが、テントサイトではコック長を務めて大活躍である。コック帽子とエプロン姿が決まっていて、いつもニコニコ好青年である。例によって味オンチの私は何を出されても旨い旨いと食う。

ギオはチーフだけあって英語は話せるようであるが、ちょっと疑問なときもある。鈴木さんは大の南米ファンでスペイン語も話せるので、ほとんど彼らとはスペイン語で話している。実は私もこの4月からの定年退職を機に、英会話学校に通っていて、1回当たり2時間の授業を週2日程度受けている。海外旅行をしたときにブロンドのお姉ちゃんを口説きたいという不純な動機である。まあそれはともかくせっかく海外へ行くのであれば、英語をしゃべることができれば楽しさも倍加することは間違いない。ギオを捕まえて英語学校の成果を確かめるために実践訓練をする。彼は33歳で独身であることくらいは判った。“どうしておまえみたいないい男が独身なんだ”と聞くと、ペルーの経済情勢では結婚できないなどと言い訳をする。もっともはるかに年上で独身の俺が彼に説教するのはおかしいが。彼はガイドという仕事に対してもかなりまじめ人間であり、食事のときなどわれわれが集まるときには必ず付き合う。滝野川姉妹のお姉さんのほうが、“日本人同士で、自分たちの話ばかりしているのに、いつも付き合ってくれて悪いわねえ”と言っても、ニコニコと“いいんですよ”と答える。本当に好青年であるのに、ペルーの女は見る目がない。そういえば日本人の女も見る目がねーな。(これは俺の独り言)

ガイドはギオのほかにジイサマ然としたヴォルケーノが主に先頭を務めてくれた。寡黙なジイサマなのでスペイン語だけで英語は話せないのかと思っていたが、英語で花やサボテンの名前を聞くとちゃんと答えるので、解るのかもしれない。

ここでは、われわれの荷物や食料運搬を担当するロバ使いがテント設営も受け持つ。朝食が済むとテントの撤収や荷物まとめをして、先行しているわれわれを追い抜き、次の宿泊地にわれわれがつくころには、もう宿泊の準備は出来上がっている。お客様のわれわれは自分の荷物だけを持ってただプラプラ歩けばよいだけであるので楽チンである。耳に赤いリボンをつけたリヤマ（らくだの一種）も一緒に歩いているが、特に荷物を持つ風もない。ロバがばたたときのスタンバイであるという説明を受けたが、南米トレッキングの特徴をツアー客に印象付けるた



写真 8 コック長兼ポーターのホセ



写真 9 チーフガイドのギオと



写真 10 ロバの荷運び



写真 11 リヤマ

めのアクセントであろうと思えた。

4. ツアーメンバー

滝野川姉は海外慣れしているようで、女性の中では唯一英語でギオに話しかける。65歳前後と推察される姉は言う。“今はまだヒマラヤなどの未開国専門で行くけれど、年取ったらヨーロッパアルプスへも行ってみたい”、私が余計な口を挟んで“じゃあもう十分資格があるじゃないか”と言うと、彼女怒ったの、怒ったの。妹は山登りに弱いのでいつもは来ないのであるが、今回はそれほどきつそうでないので来たということである。滝野川姉妹は二人とも独身という感じであった。南小岩さんも独身ということで、今回は独身者が多い。お店を経営しているらしい。彼女もずいぶんたくさん海外の山へ行っているようであるが、お店のことがあるのであんまり長い旅行はできないという。何のお店ですかと聞くと“ご想像にお任せします”などと気取っている。こういうのに限って変な想像をすともものすごく怒るんだ。あやうく余計なことをいいそうになったが、滝野川姉のときのことを思い出してぐっとこらえた。

阪南さんはチャーミングなおばあさんといったところか。おばさんといわないと怒るかもしれないが、孫もいることであろうからいいとするか。やたら記念写真を撮るのが好きである。必ず自分を中心にしてバックに景色を入れる。何枚かの写真の一枚に自分を入れるのが普通であろうが、すべてといっていいほど自分が中心で人にシャッターを押してもらい。眉をひそめたくところであるが、彼女のあっけらかんとした日ごろのそぶりが周りの人にそのような感情を持たせない。考えてみれば誰だってアルバムに写真を貼るときは自分が写った写真が優先されて、風景写真なんてまとめて箱にぶっこんでいるはずであるから、ちっとも変な行動ではない。素人の撮った風景写真なんてどうせろくなものはない。10本くらいはフィルムを使ったであろうからアルバムの量も大変だ。

愛知さんはとっつきにくい人という感じであったが、日がたつにつれて饒舌さが増してきた。海外登山は初めてということなので、最初は緊張感があったのであろう。娘が二人いて、元は看護婦ですでにリタイアしたらしい。山のベテランかと思っただ、数日間行動をともしてみるとそれほどでもない。最初は後ろのほうを歩いているが、突然ストレッチをしながらスピードを出して前のほうに出たりする。高所ではゆっくり安定した行動を取るのが鉄則であるので、あまり感心しない。しかし帰りのバスで、三島氏が気分を悪くしてしばらく休んだときには、さすがに元看護婦さんだけあって、冷静かつ的確に加えて優しい介護をしていた。さすがである。看護婦としては一流であったのであろうということうかがわせる。

高所であるので、血液中酸素濃度の計測も行われ、水をたくさん飲むという高所対策もツアーリーダー



写真 12 ウニオン峠の阪南・南小岩さん



写真 13 ウニオン峠で全員集合

から指示される。以前にヒマラヤやキリマンジャロで会ったツアーリーダーの海輪さんは、たくさん水を飲んで一晩に2回くらいは小便に起きるくらいではないといけないという指導をしたが、今回の鈴木さんはそこまですることはなく、人によって考え方も違うようである。私は寒空のすばらしい星を見るために、いつものように一晩2回は小便に立つ。この感激を味あわないと高所登山をした意味がない。なんとって南米だ。南十字星が微笑みかける。天の川もきらきら流れている。なぜかここへ来る前に見たゴッホ展の「夜のカフェテラス」に描かれた大粒の星を思い出す。私が子供のころは東京でも天の川が見えた。今は見えない。物理的に見えないのか、星を見ようと思う心がなくなったのか。その両方かもしれない。少なくともこんなに大きな星は東京では見ることはできない。大粒の星という共通点で「夜のカフェテラス」を思い出したのかも知れない。一晩テントで同室になった愛知県の岩倉氏は、小便入れを持ってきていて外へは出ない。もったいない。寒さなんて、この星を見れば何でもないので。外務省のキャリアを勤める娘が自慢であり、話の端々に娘が顔を出す。かなり高官らしく、世界中を歩き回り今はインドに赴任しているという。優秀すぎて縁付かないのが親としての悩みであるということで、人にはいろいろな悩みがついて回る。今回のツアーメンバーは独身苦難症候群軍団か。(なにこれ)

5. ペルー・アンデスの山岳風景

世界の登山家から人気第1の荣誉に輝くアルパマヨ山は、この角度からでは有難味を感じない。げっそり削げ落ちたほうを正面にして、貝殻状の山容を見たほうがいい。そちらへ行く登山ツアーもかつて有ったらしいが、なぜか人気がなくツアー不成立が多く取りやめられたらしい。

ペルーでもトレッキングによる観光収入は大きいみたいで、たくさんの外国人に出会った。オランダ人・ドイツ人・イギリス人・日系カナダ人・イスラエル人などなど。例によって“Where are you come from? (どこの国からきたのですか?)”を連発する。イギリス人の夫婦連れとすれ違ったときに、“ずいぶん遠くから来たんだね”と口走ってしまったが、もしかしたら日本のほうがはるかに遠いのかも知れない。日系カナダ人の女の子と出会った時には、相手は日本語ぺらぺらなのに一生懸命英語で話しかけてしまった。こっちだって英語学校に高い授業料を払っている事情ってもんがあるんだから、勘弁してくれよ。

ルピナスっていう花は、地面にとうもろこしの皮をむいたやつをおったてたようなだけをいうのかと思ったら、ここでは一塊の木の株状態になっ



写真 13 アルパマヨ山をバックに



写真 14 株型ルピナスと自立型ルピナス

ているやつもルピナスであるという。花の名前に詳しいやつだったら大いにこだわるであろうが、私の場合は“へーそうかい”で通り過ぎてしまう。今回のメンバーは全体にその手の人が多かった。赤道に近いだけあってサボテンも多い。はるばる南米まで来ているんだから、やっぱりこういったものが見られないと来たカイがない。

みんなが一生懸命写していたワスカランやアルパマヨの撮影にはピンとしたものを感じなかったが、この広大な溪谷美には圧倒された。ヒマラヤのランタン谷で見た溪谷美も相当なものであったが、ここもそれに劣らない。バカでかい大陸のバカでかい山脈だから得られる景色であろう。



写真 15 サボテン



写真 16 広大な溪谷美

6. ペルーの町の風景

トレッキングが終了して、飛行場のあるリマへ帰るまではやはりのんびりした時間帯になる。ペルーの景色をゆっくりと眺める。

南米を愛してやまない点において自他共に認める鈴木さんが、ペルーらしい料理屋へ案内してくれる。とにかくその量の多さには度肝を抜かれる。前菜だけですでにわれわれが考えている一人前を超えている。さらにメインディッシュのステーキが出てきてまたまた驚く。肉はぺらぺらに薄いのであるが、面積は大きい。その下にはひよろ長いインディカ米がぎっしりと敷き詰められている。どうやって食えっていうんだい。残すのはもったいないといって食ったが 1/3 も食えなかったと思う。

リマのあたりの年間降雨量は 10mm 程度しかないらしい。ちなみに東京都の年間降雨量は年間 1 500mm くらいである。山岳部から海沿いに出るまでは砂状の崖の途中に大きな岩が頭をもたげのようにこびりついている。日本だったら“頭上注意”のマークがついたりするところであるが、水分が少ないということは岩がずり落ちる危険性も少ないようである。

海岸線の道に出ると、両側に鳥取砂丘に見るような砂丘がいっぱいある。その砂丘の上に労働者の住宅であると説明を受けた

家が建ち並ぶ。ここでも雨が極端に少ないので崩れ落ちることもないようである。ごみ収集というインフラがないためか、砂丘の肌には散乱したペットボトルが目立ち、汚らしい。

リマが近づくと女性のスラックス姿が目につく。スカートをはいているのは年寄りだけといっても過言ではないようである。すその広がったパンツロンではなく、ジーンズも少ない。単に流行なのかどうかまでは一旅行者の知るところではない。一様にスタイルはいい。おっばいはツンと上を向いている。下着をとったらばどうなるのかは、やはり私の知ったところではない。昨年行ったメキシコもスパニッシュの血を引くので同様であったが、残念ながらメキシコの女性はおっばいと同様に腹のほうも自己主張が強かった。ペルーの若い女性はスマートな人が多い。

深夜の飛行機に乗るまでの短いリマの夜を、フォルクローレの演奏付きのレストランですごす。日本人からは必ずリクエストがあるようで、“コンドルは飛んでいる”をやってくれる。歌手が歌う前に日本語で“コンドルは飛んでいる”と言ってから歌いだした。縦型ハモニカとでもいえそうな楽器（名前は忘れた）を大中小3つぶら下げたおにちゃんが、一生懸命に歌う。歌うのと交互に縦型ハモニカに食らいつく。哀愁こもるかすれた音を出す大きいやつや、高音用の小さいやつを忙しく吹き分ける。相方がギターでアクセントを入れる。寄席芸人の染の助・染太郎を思い出す。片っ方は重労働で、もう一方は一見楽そうだ。鈴木さんがスペイン語で時々話しかけるのに気を良くしたためか、ずいぶん長くわれわれの陣取る席で演奏をしてくれた。

アトランタでのトランジェットを含めるとまる1日を超える帰りの飛行を考えるとうんざりするが、この演奏で少しは気持ちが安らいだ。



写真 17 リマ近郊の労働者住宅